

「人生も、世界も、確かにつらいことばかりです。『どうしてこんなことが起きなければならぬのだろう。』無意味な問いだと知りつつ、思わずそう問いたくなる悲しい出来事が起き、そのたびに無力感に苛まれます。」

これは昨年のニューズレターに私が書いた文章です。それから1年経った今、この無意味な問いを繰り返し問い、かつてないほどの無力感に苛まれる日々が続いています。

千年に一度と言われる大災害を前にして、言語学者に何ができるでしょうか。何もできないでしょう。「学問は人の心を豊かにする。」そんなことを言っても、空しいだけです。今まさに命や健康を奪われようとしている人たちに言語学の本を読んで聞かせて、何が豊かになるでしょうか。「こういう状況になって、自分の無力さを感じる。」そんなことを思う言語学者もいるかもしれません。私はそういう人に言いたくなります。「そんなことも分からずに言語学者になったのですか?」言語学が人命救助に役立たないことは、災害が起きる前から分かっていたことで、災害が起きて初めて分かるというのでは、鈍感の誹りは免れないでしょう。

一つだけ言えるのは、人命を救助できるかどうかという尺度で言語学(者)の価値を測るのは、たとえばパンを作れるかどうかという尺度で消防(士)の価値を測るのと同じくらい、誤りだということです。他人が悲しんでいるときに、悲しみを共有しようとする。他人が困っているときに、できる限りの手助けをする。これは当然です。しかし、「千年に一度の大災害で多くの人が困っているときに、言語学なんかやっていていいのだろうか」と自分を(ましてや他人を)責めるとなると、話は別です。言語学に価値がなくなるのは、定義上、この世界から言語がなくなる時だけです。そして、言語がなくなれば、「言語学には価値がない」と語ることさえできなくなります。逆に言うと、「言語学には価値がない」と語れるうちは、言語学には価値があるのです。大災害の前も、後も、言語学には価値があるのです。「千年に一度の大災害で多くの人が困っているときに、言語学なんかやっていていいのだろうか」という思いは、いったい誰の何を責めているのか、おそらく言っている本人すら分かっていないような空虚な思いにすぎません。他の条件が同じならば、「研究を放棄した研究者」より「研究を続ける研究者」の方がよいというのは、ほとんど言葉の定義の問題でしょう。「パン作りを放棄したパン屋」よりは「パン作りを続けるパン屋」の方がよいに決まっています。大災害の前に大事だったものは、大災害の後も大事です。人命救助に役立たなくても、大事なものは大事なままなのです。

これに対しては「大災害の前と後(特に直後)で、はたして言語学にまったく同じ価値があるのか?」と問われるかもしれません。これには「そこまでは分からない」と答えるしかありません。価値はいくらか減るかもしれないが、価値はある。それだけ確認して、冒頭に掲げた昨年のニューズレターからの引用箇所の続きの一文を引用します。

「しかし、ただでさえつらい人生を、自分の手で余計つらくすることはありません。」

だから、言語学者はこれまでどおり言語学を続けるべきです。私は読者の皆さんに説教をしたいわけではありません。私は、この文章を皆さんに読んでもらうことによって、無力感に苛まれる自分自身を鼓舞したいのです。私が無力感に苛まれることで幸せになる人は間違いなく一人もいないからです。自分を無力感から救い出す哲学としての言語学。私はこの技術を手に入れることを目指したいと思います。そのような哲学としての言語学は、死にゆく人を誰一人救うことができなくても、生きている他人を誰一人幸せにすることができなくても、生きている自分を救うことくらいはできるのです。何もできないよりは、ましです。

さまざまな思いを抱いた研究者と例会でお目にかかりたいと思います。

(2011年3月26日記)